博文館記念書翰集 其二
軸 18
71
2 上

博文館記念書翰集　其二

第三五号

雑 18
71
2 上

大橋圖書館印

卷中目次

大橋進一君

番場宗八郎氏代筆 昭和五年八月五日

大橋圖書館

卷中目次

大橋進一君（番場宗八氏代筆） 昭和五年八月五日
田山花袋氏 昭和二年十一月三十日
石井研堂氏 昭和三年四月二十二日
松原岩五郎氏 大正六年六月二十日
森山吐虹氏 明治三十五年四月十七日
木村定次郎氏 大正三年十二年五日
海賀篤麿氏 大正五年一月廿九日
阿武信一氏 月二十四日
西村恵次郎氏 大正六年六月二十二日
金子範二氏 大正六年六月二十日
武田鶯桃氏 大正五年二月四日

以上

拝啓炎暑の候益々
御清祥奉慶候
陳者御書ははがきを頂
戴致難有拝見仕候
暫くは御滞在の様お取
候へは大切に御静
養被遊

信越線田口駅
妙高温泉かねた館方
坪谷善四郎様

昭和五年八月五日

東京市小石川區戸崎町四十六番地
株式會社 博文館
取締役社長 大橋進一
電話小石川七八〇〇番

戴致難有拝見仕候
暫くは御憔悴の様拝承
仕候之ニは大切ニ御静
養被遊度
御仰の如く本年も昨年
の例ニ倣へ雑誌宣伝
ニは利用致度本
日嬉楽もの少々御送
付申上置候御手数
様可然御領布御願
申上候
次ニ先般は御配慮を
忝候 姉崎博士より
樗牛の序文を頼
候処早速作成もらへ
御面被下候何卒御
安神被下度 斯く
速ニ相運候事一偏ニ
先生の御配慮の賜と
深く御礼申上候 先ハ

標牛の序文御頼
み候 早速作成書房へ
御届致下され候 何卒御
安神致下度 斯く
速く御運び候事 一偏に
先生の御配慮の賜と
深く御礼申上候 先は
不取敢右御通知旁
御挨拶迄如斯御座候
八月七日 敬具
大橋進一
坪谷善四郎様

牛込区北山伏町
坪谷善四郎様

市外代々木一三三
田山録弥

廿一

いつれば御沙汰之
ノ筈今回は結構
れる地理書目頂戴
出来ますやうは話致下
は確にていろ〳〵地理

ノされし今回は結構
れる地理書目頂戴
出来ましやうは話致下
は雑にていろいろ地理
を猶く便を得感謝
いたし候 先方へは御
世子従ひは礼状さし
出候 先方は礼ま
でいつれそのうち月に
てり 萬こゝろの中述
候不宣
卅日 田山生
坪谷先生
侍史

麹町区飯田町一ノ六
大橋図書館内
坪谷善四郎様　（三）

下谷松山町二七[?]
石井研堂

印刷付　壹萬枚　一六、五〇　五千枚　八、七五

九段、飯田町三ノ一〇　小出印刷所　電、九段（33）三四二七番

No. 1

坪谷善四郎様　石井研堂

華札拝誦、先生には御子数を殖ばし[?]御此事に
御座候、始めて上る心算を致したるが多分六月
号の、文藝春秋に拙稿大槻如電先生ノ一則
出来の筈、御贈呈[?]被下大坂図書館の銅板
の錦絵文字の筆者が誰のなるかの為めに根拠ある話
説として考証ずきの小生としては精密をすすめし
はこの機会を利用して前以て上申候
貸本屋の事、従来ポツ／＼見て覚えしは明治
も只今即座に憶ひ出し上る絵の蒐集をも表面の出
来るは嘉永天保ころの御城下の貸本業は案外
多かつたらしく初代広重の江戸名所絵等には貸
本を背負ひて道上を歩くもの見え、其景人物として
取り入れたる数は全体多くあるに非ず、残りは後世とし
て明治後の各種の錦絵等も市上の光景を現

No. 2

はさうとすればすぐ貸本屋が俤ばしますものを高いもの
を添加し一寸拙稿の明治年代の分をもならべて見
ましたに

明治三年年　よし藤画　おもちや絵に　貸本屋あり
〃　四月　芳虎　画　東京日本橋風景の中に　貸――
〃　四年末二月　国政画　竜ノ口繁栄の図中に　貸――
〃　四年年七月　国輝画　東京高輪馬車人力車往来の図に　貸――
〃　〃　八月　三祥画　九段坂上招魂社の図　〃　貸――
〃　四年十二月　三祥画　浅草金龍山の図　〃　貸――
〃　八年年　孟斎画　新開名所永代橋之図に　貸――
〃　〃　広重画　両国橋新築之図に　貸――
〃　十五年　栄斎画　浅草馬車鉄道之図に　〃
〃　十九年　国輝画　浅草観音境内の図に　〃

何れも風景の一本をきりいと見るるをせあひ、中には

No. 1

坂谷吾郎様　　石井研堂

華札拝誦、先日ハ御手数を煩ハし御謝此事ニ
候、今般初めて申上る心算ニてみる者が多分六月
号の、文藝春秋ニ拙稿大槻如電先生ノ一則
学男の節、御賢兄誰にか大坂図書館の銅板
の鋳出文字の筆者が明らかとなる為めに拙稿ある話
説として考証ずきの小生としてハ稍得ちまする
ハこの機会を利用して拙此で申上ます
貸本屋の事、従来ポツポツ見ても覚えハ候ハ
ゆ只今即席ニ思出し申上る程の蓄積ハ無之表面の已
ゆるは嘉永天保ころの都下の貸本業ハ業者
多かりしらしく初代広重の江戸名所絵类ニは貸
本を背負ひて往来を歩くものゝ貸本屋人物として
取り入れてゐる数ハ全体多くありません　後後きし
て明治後の名作の錦絵ニも市上の光景を現

No. 2

はさしとするけはすぐ貸本屋が得らしますけを描す様
を添加し外には一寸拙者の明治年代のものを見るを
しるしに
明治三年　よし藤画　おもちゃ絵ニ　貸本屋あり
〃　四月　芳虎画　東京日本橋風景の中ニ　貸――
〃　四年末二月　国政画　竜張町繁栄の図中ニ　貸――
〃　四年十月　国輝画　東京名所馬車人力車従来の図ニ　貸――
〃　八月　立祥画　九段坂上招魂社の図ニ　貸――
〃　四年十二月　立祥画　浅草金龍山の図ニ　貸――
〃　八年　孟斎画　新川名所永代橋ノ図ニ　貸――
〃　〃　広重画　両国橋納涼ノ図ニ　貸――
〃　十五年　栄斎画　浅草奥山繁栄ノ図ニ　〃
〃　十九年　国輝画　浅草観世音境内の図ニ　〃
何れも風景画の本をさらしとなしみるるをせあひ、中では

No. 3

其の中ニ二冊の本をもたせこるもあり、他の写眼よりせり
画服と申すは判然区別出来ぬ。
太へ申上ましてもなく店舗を有する者が客の来るを待つ
のではなく得意先を廻りて貸して歩く行商の一種でし
名古屋の大惣といひしは店卸をも兼る大貸本屋
ヱ其業者会郎ハ都下の好書家の多く帰しへ出ハ明
治の末と覚えて吉川半七氏の紹介にて都下へ分散
せしかと
神田猿楽町のイロハ書房の貸本ハ最も近年まで
営業せりしこと拙者現代中分類の民業中の貸本
業の部ニ其梗概を掲げおきしは若し御参考ならば
是非御一覧下さいまし
尚至急自営営業天...の内ニ二篇
不得要領ニ暇陳ミ申上候
四月　廿六夜
研堂

牛込区北山伏町七九
坪谷善四郎様
直披

鶴巻町より
一老生
座下

拝啓
御懇篤成ル御書面
頂戴感佩之極
に奉存候
実ハ疾ク拝趨致し
多年の芳情を

実ハ疾ク拝趨致し
多年の芳情を
謝し度く所請
諸事ニ掛懐
乍ら居候ニ存
丑数筆し幸の
候蝶し
為ニ陣中閣下
際御諸ノ奉紙
中ニ上リ申兼候へく
今回の変遷ニ就て
三殿ハめ候や
不為共ニ在
おい陽ノ為ニ

不拘共十七生に
お陽さまの為盆
のごまかし放
洋々自適度
撥を学んで心境
快然にて居り
未々稀にても自身の
御好頭兼ね心
必ず禅趣の
蓋意ん ながら 寸楮
五月
松若亭様

これに試候も何卒の
御好短冊兼而心
必ず揮毫の
着意候 尚は
寸楮

七宗若亭
三月 様

坪谷水哉様
御中

拝

本日は[illegible]来て

[illegible]へ

[illegible]

せめて[illegible]

[illegible]

[illegible]

牛込矢来町四番地

坪谷水哉様

三田四国町十五

森山[illegible]

十七日

め
ばかり也
併積ゝ成候
来今日御
来年春解
まり候ても
の節間もこれ
まい遠ゝ拝顔
の後又ゝ申
き遠慮なく
御めてたく　仕合
先頃あまり　申入
之候哉を併江
不申候　恐惶
十七日　ち江

思ひつゝき 任
先途ありて 時雨の
ゝ情親を侍ゝ江
乙甲ゝら 殺見
十七ら 時 松
如哉 揮
何ゝ晩の時文
錦ゝ様の扇人
潤の雨ゝ三昧
余ゝ子 王

拝啓 陳者此の度の事ニ付テハ
一方ならぬ御配慮を煩し実ニ
申訳次第も無之 扨て武田
君の儀ニ付種々御意見有之候
所当今度の事は積年の希
望ニ有之 決して現職ニ不平あ
りて若くハ又過日言明候如くの
く退隠の上は他日一の事
業を以て打当る等の野望あり

小舟用

四十四年度 3

牛込区北山伏町
梓沢善四郎殿
御直ニ

〆
十二月廿七
下谷上根岸一七
木村滝次郎

く退隠の好味は他よりも日一の事
業を以て打出する等の野望あ
りたるが此後は全然少年以来

(六月調製)

以外別方面に自己の新天地を
発見する事に苦慮候如く就
ては先着御縁了重て一封呈
私儀も御承許まで御見込在
如く在少年以来寵遇の殊恩
に對し聊か小生の思ふ所を具
陳したるの次第に候 貴殿及
岩谷先生に對し御迷惑在
之候事甚しく此の候何卒
岩谷先生の御許しを御取成し

小舟用

四十四年度 3

(六月調製)

ことな在て勿論此の方面
中に在り只単に小生の希望を
記するに止め更に是れが為に生
[illegible]の身[illegible]駐剤に重まれ[illegible]意

ことなく狂気 勿論此の書面
中にも只單に書の布置を
記すんとあるなり 夫れか為めに生
いかに為す 酷刑に處せられしも慮
未仕候間 拝(?)たん特おの治所
計ヽ讀み玉ふ解九解 御赦(?)
申上候　敬具
以来平(?)は在石三翠(?)中沢(?)の為に九(?)
老生御延引致し候 従者の御贈
御送る一層の御連絡有之 口陳(?)度
十月廿一日　木村(?)由(?)母(?)
坪内先生
梧右

小舟用
四十四年度 3
(六月調製)

拝啓
今回小生退館ニ際して
館主より特別の御同情を賜
りし事感謝の外無之候 然る
ニ退せられ候理由ニ就ては
多少の異議は有之候もまや
抗争致せば何の効果無之
ことに候 唯々として命を奉
じたる次第ニ有之候 然るに
在 最早何事も申上げまじく候
去りながら十年一日の如く 御
館ニ従事し来り 文芸倶楽部
ニ到りては愛児と申ふべき
感もなしたるに 将且本誌の
前途ニ就ては甚だ寒心ニ堪え

牛込区北山伏町廿九
坪谷善四郎様
親展
（七）
麻布区霞町一
海賀篤麿
一月廿九
緘

稗に従事し来り　文藝倶楽部
に別しては賞賛を失ふたる
感あるにあらず、抑且其法の
前途に就ては甚だ寒心に堪
えざるもの有之　右は小生の愚
見ん所にては勿論才能の故
を以て館を逐はれたる雅生好
の意見が何事の價値あるも
なきもあるべきも思ひ居り升
愚の一得あらんかも知れず、苟も
の言として一應は御聴取
下され度

文藝倶楽部に對する意見

一近来小説の振はざるは一般雑
誌界の不振の因とは勿論なるも
販売方法も一部分の責任は
負はざる可からずものと思料す
館以外の者は何れも諸雑誌
が新聞廣告等の意を用ひたるに
反して博文館の廣告は貧弱
なる様なり、文藝倶楽部等の如きは殊に縮り
とす、或は説をなす者あらん
文藝倶楽部は二十餘年の久しき
に亘りて発行しつゝある雑誌
なれば殊更に廣告を大にして読
者を求めずとも知る人ぞ知る　従来の
精力に依りて長く名声を
贏ち得たるに足らんとの見地
を以て拱手晏然たりとせば大
なる誤りなり　讀者は常に替地と
言ふ可し　相當の新作家を信ずる
者にして文藝倶楽部の存在を知らざる者

ある一誌あり　嘗て宮村麟也と
云へる　朝鮮の都府に居住せる
者ありて　文藝の方面を研究せる者
あり、近く新潟の或る人より
「青鞜」に就て　文藝倶楽部とかいふ雑誌
の発行あるの由　及びそして一部お見
せ被下度　云への書状を接して呈然
たりし事あり　是等は廣告
方法の法く行きたる結果なら
んと信ず　講談倶楽部のぬき
大々的廣告は費用の点より前に
せよすも　損失あらん　之に依て
益する所また甚少なかるべし

一、

一　講談雑誌の発行せられつゝ
ある今日に於て　文藝の増刊に
講談を載するは無用なり　材
料を講談以外の方面に採らざれば
遂には共倒れに終るべし

一　編輯上に関しては少からず
異議あり、

○百花園（即ち講談文藝欄）は依然と
して盛なり　売れ行も七八年前に比
して寧ろ以上の盛況を呈す　是は
毎月集まる　懸賞募集ハガキの
数の些の減少をも見せざるを以て證
とするに足る　講談不振時
て之は反比例の觀あり

○雑録に至りては　本誌の最
も長所とする所　他雑誌に見
ざる特色あるものあり　但し近来
稍材料の平凡なるものあるを
文藝記事の比較的少きは注

学

も長所とする所し他雑誌にみえる能はざるものあり 但し近来諸雑誌の平凡なるものあるは演藝記事の比較的多きは注意すべき点なり。

○本欄（巻頭小説以下脚本寄雑録以外の分）

文藝俱楽部の価値は雑録以下にあり、と云ふ一点張を以て本欄を閑却すれば甚だ誤りなり。文藝雑誌と娯楽雑誌とは自ら選を異にす。文藝俱楽部が、いかに俗了したりとは言へ未だ以て娯楽雑誌たるに甘んぜらるべきか、些かも一般の文界に対して方法を目して文藝雑誌とはせず只娯楽的の雑誌と見做すに至らしむるは何故ぞ、本欄の振はざるが故なりずや 刻々と堕り行く文壇の形勢 作は是を出しまの余は気とあす、硯友派すたれて自然派勃興せしも 趨勢はまだ他を堕らんとしてあり 爰を以て各の要求に従し發刊を在る雑誌 中央公論 早稲田文学其他打ちまし是等所謂新空氣を呼吸す雑誌中に伍して競争を其になせんにも 文藝俱楽部は餘りに老ひ手なり まれに不

興味中心

を与へんにて　文藝倶楽部は
餘りに老年なり　されは
ばかりを顧みずして　興味中心
的のものを満載して
一部の読者を牽制せんとす
其見地や甚だ低し　志ある
事毎に之に供するを好めな
らん、見よ女流の揚げつゝ
ある小説の一として見るに足る
ものなし　陳腐ならざれば平
凡なる作品の蝿を嫌はしむ
いかに頭脳の古き読者なり
とて此ものに満足すべきか
加之　其等の読者は年と共
に減退して　新鮮気を
喚起する青年の輩出する
時代に於てをや、昨一年間
に通して　文壇の注意を引
き得る作物は田山花袋氏が
「海岸の家」の一篇のみなりし
に至りては心細き限りなりや
故に新進作家を迎へず吾
新旧の有する花にして尚は文
壇上生命を保ちつゝある　風葉
秋声、鏡花、春葉、柳汀の
者の作を掲載せば　文藝倶楽
部の今日の如き衰勢を（文壇上に於ける）
先陣すらにも至らざりしならん
文界に於て既に絶命者となり
居るべき宮崎三昧、須藤南翠、（喜）

部ら与ふめでた[illegible]（に放ち）
先陣するにも至らざりしならん
文界に於ける既に絶命なりしも
なんぐき宗教三昧、欲為[illegible]、
饗庭篁村（劇評あらしてはは大家あれ共）氏（等）の作が
揚げられしをなる毎に文藝欄
の部は慈善なる事業の為に
発行せられつゝあるかと疑はさ
るを得ざるなり、現状維持
の方策も而もこそ依れ時勢
の推移を雲烟過眼するものぬき
は識者の患ふる所となすを不可とす
爰に氏名を表さずと雖も
昨年来同一人の作が屢々揚
げられし事あり其の情実の
密なるは論なきも世人も亦
如き読者の振をさる一因たらずんば
あらず、
女流作家としては田村とし子の
ぬき操行のめには頗る非難
あるも、兎も角も当世の
人気ある人の作を載せたらん
にも一新の読者の迎ふる所なる
あらんかと、予は一度建議
せし事ありしも之は容れられ
ざりき
二月号の如きは一両日中には
発行さるゝ為の巻頭小説の
「漁樵問答」の如きは約二十年
前國民小説に出たる春の家
氏（坪内）の「細君」を布衍したる

みなさる　その若盛に説

「漁樵問答」のぬしは約二十年
前　國民小説にて出たる春の家
氏(坪内)の「細君」を布行したる
に過ぎず　去りも「細君」のぬき
簡潔にして痛切なるものあら
ず、三十年前の作物が大に
五年の序はまちて陸續平
凡のものにて生れ代りて世に
ものとなりては只て呆然たる
のみ　この作に比しては泣よ
揚げたる　暁紅子の「お玉ヶ池」の
方すけの興味はなすなり、
新年号　美顔にも出たる　渋柿
氏が「直江山城」のぬきも問題
とするに足らず、寧ろ山田葎
南子人の「お勝さん」の方を採
らんとす　徒らに言類の奇矜
材を探りて老大家を迎ふるは
弊は筆のさきなすぎらず、
此池すけ執る事すけの意見なき
事あれば一と先ぐ先ぐ擱
筆することとす
大雲右しめく愚見を添えまつり
揚げたる足る「此ものゝ」少からんぬ
只当奇もとにされたる様に過ぎせ
次第に御座候　小生の心事
晴れたるも咲るの解られ
ても幸に過之い
和具

揚げたる　暁紅子の「お玉ケ池」の
方すぐれの興味は有之候へども、
新年号美談ずもなる浅薄
なる「直江山城」のごときも問題
とするに足らず、寧ろ山田美妙
斎主人の「お勝さん」の方を採
らんとす　徒らに古難の筆致
趣を弄びて花大家を迎合する
弊は萌ゆさる所に有之候。
此池ヶ競ひ勝れる人の出でん事
を待ちて一と先づ見えて掲
筆することにせず
大要右の如く愚見に及び
掲げた足る「それもの」少からん
只宜しく示すべき御添削を
以て御海容下され度く小生の心事
萬々御了解被下候はゞ
まし幸不過之候　敬具

廿九日　海於鳥?樓

坪内善四郎様

侍史

堺谷水哉様
貴酬

阿武信一

（八）

赤城先輩手足
御来翰を拝読旅館
夫婦を来年一面何
昔趣雅しく新しき哉
此月に平ては味承
拝趣
親敬
拝

此日に乎とは味技
拝趨し親敬し講談
ことに有こと[?]
相替くゆる事にて拝
其四兩を再用
空亭に話中居
江沖に在住人
昭者木多居を迎る
は哈り上ちおゆ
娯倒客が自ら歓
みて硯門世に採く
聖
耻ち人[?]中に居帯
想つみて花石と欲
はし罪力能有り
ゆと胡に以て尽し
東方氏生れや亢年

早ゝ胡乱に申上候
本多氏まで申上候
一応御様子様の上
何か取計被下度候
く一通の不情手
をいて御仕合悦ません
不思先生の御高
煩ん許めるに付
御用の折々御話
早々の上当郡是非共
先は右要用のみ
以使申上候　頓首

寛信

日野資愛

一

懐旧之恋

三首和哥

小生(?)宿の花を

未は已葉竹の

二十條篇

ゝ住ゝ此て院

庵は出ゝ之南

俗の遊ゝ絲新頃

家の何石堀限

然ん面そゝ比は花

ゝとの南へ

芳翰拝誦[illegible]
折柄[illegible]
御繁劇[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

存[illegible]御繁劇[illegible]
[illegible]
[illegible]一寸上
[illegible]
[illegible]
[illegible]

牛込区北山伏町二九
坪谷善四郎様

（九）

柏亭

〆
六月二十日

東京青山原宿一七〇
西村渚山

貴翰拝誦仕候。然は
折柄之世ゆゑのみおもはれ候
御尊慕まて御目に懸り申候
御引合せ申度所々出申候
然る処こゝに当方未而
者ゝゝ勇代之陶器ニ而
存候つき尊慕まして
御試みとしたる刀を御拙ら
趣向をおもしろく存候　一寸上
のもの見もあれ様子候
そうていは酒る大なる模失と
存候ゆへ御年々御任せ
御手前御仰はいやしき遊は求め同候
尤業ニ而御座候名らし
大徴東御手遠の拝於ては
者ねね御尺拝候へく候
こゝ御座候て書し
六月二十六日　御下拝
坪井玄哉先生

牛込北山伏町二九
坪谷善四郎様

封

青山高樹町二四
金子一乾 二

拝啓 御懇篤なる
御書面を賜り委
細承はりまつりて前
後九年に余る長き間の
御指導且つ御眷
顧に對しては御礼の申
上げやうも無之候次才ま
其中拝趨萬ゝ謝
意を表しあげたくと存じ

上げやうも無之次第ニ
其中拝誦萬々謝
意を表しあげたくと存じ
居りそうろう事ニ御座そうろうところ
却而御丁寧なる御辞
といたゞき恐縮の事に
存じ参りそうろう
不束ながら文筆を執り
是に二十年今にしてまた
と悟るはますます浅く
そうろうへ共試度の機会を逸
せず再び筆は執らさる
可く決心仕り故おゐて
手紙より好きを受けそうろうへ共
夫迄も謝絶し、ま暫くは
年月を送りたくと存じ居
りそうろう果してこのまへ氏の
身を投ずれば未だある
さへ無く、へ共幸に浮む
瀬も御座なく旧居の
御愛顧と御同情を
賜りたく尚ほまる事の
経過の上より御扶助を
御下されそうろう堪合に至る
それば永年の御懇情を
無にしたる様と恐れ存じ
日本御後援の程を

深[illegible]の
御愛顧と御同情とを
賜りたく尚ほまた一事の
径路の上より御扶助を
仰ぐやうなる場合に至り
ユヱなど永年の御懇情を
辱うしたく候と思ひし
日本御渡後の僕ども
深く願上げ置きまゐらせ候
時は五月闇の際しき
節にて御自愛相
ばされたく其中拝顔
の機を得て委曲とつくし
たくとおもひ居り候
敬具
六月二十一
金子[illegible]
拝谷善四郎様
御侍史

牛込區山伏町廿九番地
坪谷善四郎様
親展

緘
大正四年十二月二日 早々拝
赤坂區表町七番地
武田鶯塘拝

謹啓仕候
本日御賀状御返済不可能候処
趣拝承それに就ての際免は
兼而御話し致候は石橋先生
御病気御療養来年帰京の
ところ山なりとも決定候は一応
曾て小生文藝倶楽部の編輯
に携はり候に付歴史にも古今往

とも山のものとも決らば以一死
弟子小生文藝従来の経緯
に據れば以歴史によるも古往
々小生が再び文藝に指るなく
謹信し御前親子に対して脱運
動を開始し云ふる某々氏右由以
一死小生は勤くとも石橋先生
平居の厚意に報あざるべき偏
森氏の千信を以て且つは
小生の陋想として御年未曾有の界実
の進展を遂げせめて三萬五千の
発達親数に達せしむ彼主の
御希望にそいし悉鶏族の際某
ミ氏方の運動に阻止せられの為
一萬七千の郵数なる二萬一八千程
増いまだならざる本城を吹接し
以すは生年ひかへんとも南会面に

ざる民衆の運動に阻止せられたる為
一萬七千の部數だけ二萬八千に
まで増し來るに至る本誌を眺望し
ば其後生命をかへん若輩相極に
有之右橋先生將來に對して
何れ本誌は氣早の静養を望む
ば其他に於ける右翼情勢
個人的の上幹部の方々と或は
右様な次第有之候御内申
此段事旨ながら小一年ながら石橋
先生は此病氣中小生をして萬
性努力せしめられんやう致しまね
本日も中と甚く遺憾に存じ
久藤さんとの確執は格別陰陽を
醸さんに輿論的奮闘の余地
あるものと存じます右執意

右は中ゝ[illegible]申上ゝ
久藏との競爭は格別障碍を不
醸さゞる獻身的奮闘の餘地
あるものと思召候はゞ此上右熟慮
御周知被下候はゞ幸甚此事ニ御
座候

早々敬具

二月四日

武田[illegible] 拝

坪井善四郎様
御侍史